
IS ~インフィニット・ストラトス~ チートによる特権

厨二王子 & 変態王子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（インフィニット・ストラトス）

チートによる特権

【Nコード】

N0713X

【作者名】

厨二王子&変態王子

【あらすじ】

……ISのSS書こうぜ

えっ？

いや書こうぜ？

……えー……

女性にしか反応しない兵器『インフィニット・ストラトス』だが、突如、男なのにISを起動できることができた織斑一夏。しかし、織斑一夏以外にもISを起動させてしまった男がいた。

……こんなんでもいい？

ご都合主義、オリ主ハーレム、キャラ崩壊が嫌いな人はバックし
てください。そうでない人は駄文ですがどうぞお楽しみを。

作品設定（前書き）

やつちつまった……すでに難産だ。

お前が言い始めたんだろ！！

作者二人の小説です。できる限り御都合主義は通さないのでもうお楽しみを。

機体せって（ry

いつちやだめええええええ！！！！

【注意！！】大幅に設定を変更しました。

作品設定

<オリ主情報

名前：日守辰輝^{ひのもりたつき}

身長：170cm

体重：62?

容姿：一夏よりも僅かに小さめで細身な体格。筋肉質な訳でもなく、小柄に見えるためかつこいい年下の男の子とゆう印象がほとんど。茶色の混じった黒髪が肩にまで伸びていて鋭い目つきを……とゆうか早い話、聖剣の鍛冶屋のルークを考えてください。

性格：いつもは基本的に冷静だが、熱くなる時もあればギャグもいう時もある。常識が欠けている所もありギャグで言った言葉を本当の事だと受け取ることもしばしば……。

とある事情で体がとてつもなく頑丈で身体能力がバカ高いため、仲間の為に体を張って守っていたり、極度の恐怖に支配された時や集団戦闘時においては、仲間に対してかなりの自己犠牲の精神が働いてしまう様になった。

オリ主IS設定

機体名：デイヴァイン

世代：第四世代

性能：標準巡航時最大速度 3700km/h (約マッハ3)
^{エナジーウイングなし}
^{イグニッションブースト}

瞬時加速時 7500km/h (約マッハ6)

ノブレス・オブリージユ、フル展開時 15000km/hov
er (約マッハ10)

^{ヴァンガード・オーバード・ブースト}

VOB 30000km/hover (約マッハ30)

スラスター：腰部スラスターx2

脚部 スラスタ x 2

特殊可変ウイングスラスタ「ノブレス・オブリー

ジュ」x 1 対

武装：【標準装備】

胸部 高出力ビーム砲「シャルレヴィカノーネ」

腕部 折り畳み式実体剣「アヴァランチ」x 2

レーザーソード発生器「レ ヴァティン」x 2

腰部 ビームサーベル「ファトゥム」x 2

肩部 翼上展開チェインガン x 6

背部 多弾装ミサイル「レギュラム」x 40 門

脚部 高機動ミサイルポッド x 20

【粒子化装備】

ビームマグナム「ワイムルグ」x 1

高エネルギービームライフル「レイヴィント・ドライブ」

x 2 (通常・拡散・チャージ変形可能)

高初速ビームハンドガン「ヴァシコラ」x 2

アサルトライフル「ニーレンス」x 1

ショットマシンガン「ズイン」

連結実体刀「布都ノ御霊」

単一仕様能力：「?????」

備考：天才科学者、篠ノ之束から特注のオリ主専用機。オリ主の肉体が特に頑丈なものと本人の希望により、ISのシールドバリアをピンポイントで発生出来るようになりハイブリッド化に成功かつ、圧倒的な速度を出すことに成功したIS。世代は一応第四世代となっているが、これは「Non Restriction Infinite Storators Project」、通称「『NRIS』計画」による作品。「Non Restriction ion」=「制限の無い」の通り、すべてにおいて規格外の作品と

なっていました。

色は全身純白、全身の格好は……とゆうか言ってしまうえばイメージ的には重装備のアーマードコアのホワイトグランドを思ってくれて結構です。

「ノブレス・オブリージ」は本体の肩部にセットされていて、そこにチェインガンが肩の近くに一つ、翼端の上下に一つずつ配置されそれが左右体称になっている。また「ノブレス・オブリージ」、背部スラスタ、腰部スラスタによる加速、減速、移動、姿勢制御が任意でできるため、本来その能力を担っているP.I.Cと併用になり、結果的に全体の機体性能は従来の二乗となっている。

エネルギー系による戦闘を中心に行うため、エネルギー残量が問題だったが基本のシールドエネルギーはバリアーを局部展開するようになったり、各部に小型エネルギーコンデンサを配置したり、武器のエネルギーの出力を変更できるようにしたため、元々の活動時間よりもかなり長時間行動できるようになった。

作品設定（後書き）

- 俺はご都合主義は嫌いなんだよおおおお!!!
- 知るかバカ
- 俺は激しく不安だ

プロローグ（前書き）

- 更新がかなり遅れましたが、本編開始です！

- 本編っていうかまだプロロー（ry

- 黙れ。この小説の作者は学生です。多少の遅れなどは目をつぶってもらおう事を期待しています。

- 作者が学生の奴なんてたくさ（ry

- 黙れ、潰すぞ。..... どうかお気に入りやしおりに挟んで気長に見てくれる事をお願いします。

- これどう見ても宣伝じゃ（ry

- 潰すっ！！

- プチっ！

- それでは本編どうぞ！

プロローグ

カツ、カツ、カツ、カツ……………

足元もおぼつかない程、暗黒に染まった合金製の螺旋階段。そこで無機質な足音を響かせている少年。彼の手には給食でよく使うようなトレーの上に、きちんと皿に盛りつけられたフルーツサラダ、スライスしたパンのみと肩に白い水筒を引っ提げていた。

これを食べるのは運んでいる少年ではなく、この長い階段を進んだ先の小部屋に住み着いて、すでに一週間籠りっぱなしの世界的指名手配者に食べさせるためだ。

だが別にこの先にいるのは歴史に名を残すような凶悪な犯罪を犯した大罪人な訳でもない。ごく普通の、どこにでもいるような弱い一人の女性。

だが彼女は、犯罪を犯さずに、世界から指名手配されている一人の科学者。

犯罪など犯さないでも、歴史に名を残し、世界を変えた一人の天才。

彼女が指名手配、それも世界的にされている理由ただ一つ、彼女があるものを作ってしまった、ただそれだけの事。

世界から狙われる程の物を作った、ただそれだけ。

……………キイイイ。

「……………東さん。入りますよ。」

長い螺旋階段の果て、両手で持っていたトレイを右手に寄せて冷たい鋼鉄のトビラを開ける。室内は階段の闇よりも僅かに明るい黒。床にはどこから繋げてきたかも判らないほどのケーブルが所狭しと敷き詰められ、壁が見えるはずの場所には専門の科学者でも一目では理解出来ない機械たちが、これまた窮屈に並んでいる。

壁や床が僅かに姿を見せている場所にも、さまざまな設計図や組み込まれていない機械の部品が、大小関わらず乱雑に、それでいて無駄がないように、すべてのスペースを埋めている。

その部屋の中央、そこに彼女　篠ノ之束しののたはねがいた。

ピピピピピピピピ

だが、篠ノ之束は部屋に入ってきたことに気づかなかったのか、空中に投影されたキーボードを叩き続けていた。

その数、実に六枚。

常人には到底不可能な枚数。だが束は全てを並列作業で使いこなしていた。

それらすべては、キーボードとは別に空中に投影された六枚のディスプレイに接続されており、高速で叩かれている情報を送信し新たな情報がディスプレイに表示されていく。そして次々と送られてくる情報で、画面の景色が千変万化してゆき、そのディスプレイに呼応するかのように束の周辺に設置されている機械が、これまた甲高い機械音による交響曲を響かせ辺りの音を掻き消してしまっていた。

（これじゃあ返事もできない訳だ……）

当の束自身もこちらには一切視線をよこさず、目の前の“研究品

”に意識がいつてしまっていてまったく気が付いた様子 wasn't. この際仕方ない、と割り切ってケーブルの樹海を踏み越えていき、トレイを落とさないようにゆっくりと束の傍に近づいていく。

「束さん。食事の時間ですよ。」

「おゝゝ！たーくん流石だね、また時間ぴったりにご飯を持ってきたよ。びっくり、びっくり！！」

たーくんと呼ばれた少年 - - 日守辰輝ひのもりたつきの声に気が付き、束は投影していたディスプレイとキーボードを、指を一振りして消してしまふとくるつと振り返った。

束の姿は奇妙な格好をしていた。一見するとその服装は暗黒の中であるにも関わらず、その存在を誇張する漆黒。だがその上半身は男性の着る滑らかな燕尾服であるのに、下半身はゴシッククロリータの様なふわふわとしたスカート。ポケットが何故かメルヘンなクッキーになっているのは、奇妙と言うかむしろ珍妙と呼ぶべきだろうか。

日守は、束の服装は毎回何かのテーマで決まっていたと思案してみる。

「えっと、束さん。今回の服装はどのようなテーマなのでしたっけ。」

「むゝゝ、ひどいなゝたーくん。今回はヘンゼルとグレーテルなんだよ？まあ、そろそろこれにも飽きてきたから新しいのを絶賛制作中なのだ！！」

「ヘンゼルとグレーテル？」

日守の記憶では、ヘンゼルとグレーテルはグリム童話で有名な作品で、こんな服装ではなかったはずと不思議に思い首を傾げる。

「ググったんだよ。」

「??？」

「まゝまゝ気にしたら負けなのだ！！って、そんな事より、たーくんの抱えているそれはもしかして、たーくんの敬愛しすぎて止まない束さんへの貢物かね！！」

日守の疑問をよそに、束はウサギのようにぴよこぴよこつとケール山の山を越え、日守のトレーの前に跳んで来た。

「うむうむ。いゝつもすまないねゝ、いやいやお前さん、それは言わない約束でしょ。なゝんてねゝ。いったっだきまゝす！！」

ガツガツと、おそらく大人の女性がたてるはずがないであろう音を躊躇なく撒き散らし、トレーを自分の元に引き寄せることもせず、日守に持たせたままで子供の様に食べ始めた。

(……本当にこの人なのだろうか？)

束の子供の様に無邪気な行動を見せられると、ふっとそんな疑問が浮かんでくる。本当にこの人が世界に追われるほどの物を作ってしまったのかを。

だがそんな疑問は束の目の前にある“研究品”を見れば一瞬で瓦解してしまう。無数の巨大な機械に囲まれた中央の台座。そこにそれはあった。

主の帰還を待つかごとく跪く圧倒的な白の甲冑、
それこそ世界を狂わせた研究品、^{アイ・エス}“IS”。

正式名称インフィニット・ストラトス。これが世界に認められたのは、約10年前に起きた事件、通称「^{アイ・エス}白騎士事件」と言われているのが最初だった。その瞬間を境にISは世界のどの兵器をも時代遅れにした。既存の戦闘機やミサイルなどではISの前では子供の戯れでしかなかった。

その圧倒的な戦闘力を持つ兵器を生み出す事の出来る篠ノ之束は、当然のごとく世界中の研究所から目をつけられる事になり、そのどこにも所属する事無く自由気ままに世界を飛び回っている。一応、日本の研究者であるため日本からは、時に脅迫めいた通告があったが、当の束はそんなこと、どこ吹く風である。

そんな束は今現在、立て籠もっていた反動で日守の持ってきた食べ物にすぐに食べつくし、機材に占領されていないテーブルを使って、水筒に入っていた紅茶で優雅にティータイムをとっていた。

一口飲むたびに、ふにや〜と顔をとりめかせ無邪気に机にうつ伏せ、まるで子供の様だ。日守も隣に座り、束が即興で作り上げた地下でも使えるテレビに映し出された映像と一緒に見ていた。こんな所でも束の“天才性”が発揮されているのは、やはり束が“天災”だからだろうか。

「スコーンとかが無いのは減点だけど、まあ束さんはこれでもじ

ゆーぶんだよ。」

「それを言うのであれば、ちゃんと顔を出してくればその度に作ってあげますから。」

そういつて日守は軽く言葉を交わし、テーブルの上で毎日放送している見慣れたニュースに視線を移した。テレビのニュースではこれまた見慣れたニュースキャスターが最新のニュースを放送していた。内容はどこかのISの研究所が大幅な赤字に見舞われていたところに研究の途中で爆発事故が発生。よって倒産につきその研究所に資金繰りしていた会社も倒産とゆうことだった。

束は『全く物騒だね』と、緩やかな表情だったが、日守は、違った。

・・・ピクリ

「束さん、またですか？もう俺で最後にしてくださいよ。」

「残念だけど、たーくんの言葉でもそれは絶対に無理。あそこはね、私の大切な――IS（子供）をぐちゃぐちゃにしていたんだよ？そんな奴はね、私は絶対に許さない……絶対に、絶対に、絶対に、絶対に許さない。地獄の底まで逃げて、潰す。」

日守が隣の束に目を向けると、そこには一見女神のように穏やかに微笑む束の顔。だが日守は確かに感じていた。その裏の、般若の顔を。

ここで、いったんISについても少し話しておこう。世界を革新させた研究品“IS”これにはある事柄について開発初期から問題にされてきた事がある。

それはISには女性にしか乗れないという決定的な欠点があったとゆうことだ。ISの出現により、アラスカ条約というものが取り付けられ、その中にISの情報揭示があつたが、ISの最も重要なコアパーツだけは今でも束しか作れない。それにより世界の価値観は一変、「男尊女卑」から「女尊男卑」と世の中となった。

だが、それを世界すべてが認めただろうか？

いや、認めなかつた。僅か一握りにも満たない一部の男たちは、男性の使えるISを作ろうとした。だが、ISはいくら外装が作れてもコアパーツが作成が出来なければ意味は無い。ならば、男たちはISの作成と並行し、もう一つの、悪魔の研究を始めた。

すなわち、男を改造し、ISの使える男を作る悪魔の研究。

しかし、そんな事に意味は無い。人間を改造しなければISに乗れないなら、改造していない普通の男が乗れるはずがない。そんな単純なことにも気づかずただ妄信的に研究していた。

規模を広げ、根を張り巡らせ、どんな所でも関係を持ち、人種、

年齢に始まり、髪の色や瞳の色、身長や体重、さらには経歴さえ、全てを問わず世界中から実験体として男性を集めに集めた。

だがそんな研究を始めて十数年、彼らは一つの失敗をしてしまった。
ウォーキング・デイスター
“歩く天災”、篠ノ之束の逆鱗に触れたのだ。

彼らは《制裁》をされた。

嵐の様な際限のない徹底を。
悪魔の如く圧倒的な制裁で。

その存在を知ったその週には研究所はすでに存在が消滅していた。
- 物理的にも、歴史的にも無かったことにされた。そして、束がそこで拾った一人の青年。

その少年こそ、日守辰輝。時期にして僅か二週間ほど前の事だ。

『また』と日守が言ったのは今は無き日守のいた研究所、それ以前的事を含めてのこと。束は日守に話しただけでも大小合わせて数十、束の所に来てからも既に二つもの研究所を粉碎したらしく、日守は要は、やりすぎるなと言いたかったらしい。

「今回は、どこまでですか？」

呆れつつも、今回の結果について聞いてみる日守。それに別段気にもせず、束は今回の結果について日守に告げる。

「おいおいたくくん、束さんを侮っちゃ困るぜい。勿論今回も一人も死人は出さなかったし、機材も全部回収。私がやったなんて、

人類に絶対分らない様にしたから安心しなさい！！」

やはりとゆうか、束は自由奔放という言葉と共にいた。そんな束に日守は額を抑え、はあゝと深く嘆息する。束の行動はすでにオーバークル、だがそんなことは束にとっては問題外。常に自分のルールでしか動いてくれなかった。

ニュースキャスターは肝心の研究所のニュースを既に話し終えて、次の事件について滔々と語っていた。次のニュースももちろんIS。その画面にはどこかの女性がISに乗り、煌びやかな姿を映していた。

と、突然

「そそ、たーくん。ちょっと手を出してくれない？こっ、手のひらを上にびろゝっと。」

「はい？何ですか？」

日守は束に言われるがままに手を出すと、じやらりと、純白のネックレス手のひらにのせた。

「……これは？」

「束さんからのプレゼント、暇だったからたーくん専用のIS作っちゃいました！！！」

「……はい？」

「だから、これはたーくん専用のIS。名前は“ディヴァイン”、よろしくね？」

絶句。

一瞬、日守にはその言葉の意味が理解出来なかった。だがその刹那の後、その意味を理解する。

「……いつかやと思っていたが、まさかこんなにも早く。」

「んん？ たーくん、変革というものは、ひとつ起こると、必ずや次の変革を呼ぶようにできているものだよ。一改革はたった一つじや終わらない（……………）のだよ。」

そう言つて束は悠然と椅子に座り、空中に指を走らせ、一枚のディスプレイを呼び出して、テーブルのテレビに続く新たな光源を生み出す。ピピッとその画面を操作して切り替えたら、日守にも分かるように反転させた。

「よって、たーくんはIS操縦者になったので、ここに行ってもらう事になりました〜!!わー!!」

「ここは……」

そこに書いてあったのは、『公立IS操縦者育成教育機関【IS学園】』の文字。IS操縦者は原則いずれかの国家に配属されることになるが、IS学園に入学すればその制約からは外れることができる。日守がIS操縦者になったための措置だろうと日守は考えたのだが……

「嫌です。」

「えっ!?ちょ、ちよつとたーくん。育て親でもある束さんの言うことが聞けないの!?!」

「勝手なこと言わないでください。俺はここにいて束さんの世話をすることに決めたんです。そこに行ったら束さんの傍にいれなくなるので却下します!」

「たーくんの頑固者〜!!……って言っても、もう入学書類とか面倒臭いのは全部学園に送っちゃったから、問答無用で学園に入学してもらおう事になってるから。へへ〜ん、束さんのだ〜いしよう〜り〜!!いえ〜い!!」

「なっ!!束さんそんなものいつの……」

「え〜い、五月蠅い子には拳骨だ!」

ゴチ〜ン!!

「痛っ！！何するんですか、束さん！！」

「言うこと聞かない子には拳骨しちゃうぞ！」

「なんでいう前にするんですかつ！！」

喧しく二人が言い争う中、束の作ったテレビには、また新たなニュースが流れていた。

そこに煌々と、映し出されていたのは『世界初、男性のIS操縦者！？』の文字が。

それを見つめるのはただ一つ、《白の甲冑》がジッと、見つめていた。

プロローグ（後書き）

- 次回がいつになるか作者も分かりませんが、どうかこの小説を
よろしく願います。（ほら、お前も言え！）

-（ピクピク）

- 返事がない、ただの屍のようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0713x/>

IS～インフィニット・ストラトス～ チートによる特権

2011年12月25日12時51分発行